

時は満ち、神の国は近づいた

越 川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

(マルコによる福音書 1章14―15節)

「神の国は近づいた」

マルコによる福音書の冒頭、イエス・キリストは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と語ります。イエス・キリストがこの世界に向かって告げた「第一声」がこの言葉だったのです。

イエスは「時が満ちる」と言います。時間というのは「満ちる」ものなのですね。ふつう私たちの感覚では時間は「流れる」ものだと思うことのほうが多いのではないのでしょうか。砂時計を思い出すといいでしょう。流れ落ちる砂の一粒一粒がだんだんとたまっていくありさまは、まさしく目に見えるかたちで「時が満ちていく」ことを表していると言っていいでしょう。

「時が満ちる」。

「満ちる時」。

それはある目的が実現した時であり、「神の国」の到来はそうした最高の時、最高の瞬間の到来を意味します。

さて、そんなふうに「時が満ちる」とか「最高の瞬間」ということを思いめぐらしていた時に、ふと思い出したのが、ゲーテが書いた『ファウスト』という戯曲です。その中で主人公のファウスト博士がある瞬間に向かって、「とどまれ、おまえは実に美しい!」と叫ぶセリフがあります。

私は高校までは文学青年(少年?)だったので、けっこう外国の小説や戯曲を読みましたが、『ファウスト』の発端と結びの場面で、この「とどまれ、おまえは実に美しい」というセリフが出てきます。ファウスト博士は悪魔メフィストフェレスと契約を交わし、もし自分がこんな叫び声を上げるようなすばらしい経験をさせてくれるなら、その瞬間に自分の命をメフィストフェレスに与えようと約束します。

その後、悪魔は博士にさまざまなことを経験させます。メフィストフェレスはファウストに過去と現在を行き来させ、人間世界と悪魔的な世界や神話的な世界を体験させ、この世の権力者としての経験、恋愛と官能の世界などなど…。悪魔自身もヘトヘトになってしまうような、およそ考えられるいろいろな試みをつくします。しかしそのいずれにも満足できずにいたファウスト博士が、最後の最後に経験したある現実に対して、このセリフを口にするようになります。そして約束どおり、メフィストフェレスがその魂を自分のものにするのですが、その結末はともかくとして(自分で読んでください)、私がこの戯曲を読んでいてどうもよ

く分からなかったことがあります。それはいったいなぜ、また何に対してファウストは「おまえは実に美しい」と感動したのかということです。

「とどまれ、おまえは実に美しい!」

というのは、その場面の前後を読んでも、ファウスト博士が「美しい」と叫ぶような、華々しい出来事や荘厳な場面はいっさい出てこないからです。

久しぶりに昔読んだ高橋健二さんの名訳を引っ張り出して、このセリフの出てくる前の部分を一部読んでみます。

「一つの沼地があゝの山脈ぞいにあり、
その毒気でこれまで開拓してきたものをすっかりそこねている。
腐った水たまりのはけ口を作るための
最後の仕事が最高の成果だ。
わしはいく百万人のために土地を開いて、
安全ではなくとも、働いて自由に住めるようにしてやるのだ。
野は緑で肥えている。人と家畜が
まあたらしい土地に気持ちよく、
大胆で勤勉な人々の積みあげた
たのもしい丘のそばにすぐに移住する。
この内部は楽園のような国だ——
外では潮がそのふちまで荒れ狂おうとも。
そして潮が強引に侵入しようと食いさがると、
皆が力を合わせて押しよせ、穴をふさぐ。
そうだ!この考えにわしは帰服する。
知恵の最後の結論はこうだ、
生活でも自由でも、これに値いするのは、
それを日々に獲得してやまぬものだけだ。
だから、ここでは、危険に取りまかれて、
子どもも、おとなも、老人も有為な年を過ごす。
わしもそういう人の群れを見て、
自由な土地に自由な民とともに立ちたい。
その時は、瞬間に向かってこう言ってよいだろう。
とどまれ、おまえは実に美しい! と。」

(『ファウスト』 角川文庫 643～644頁)

ゲーテの時代

最初に読んだ時には文章の意味が分かりませんでした。「なんだこりゃ」というのが率直な印象でした。

今もよく分からないのですが、すなおに理解するなら、ここでファウスト博士が感動したのは、みんなで力を合わせて土地を開拓していく人々の姿であり、一人ひとりがそれぞれの仕事を担いつつ、日々の生活に立ち向かって生きる姿、危険に取りまかれていても、共に働き、共に自由に生きる人間の群れだったのだと解釈するしかないように思います。

それでも私には「はあ？」という感じでした。ありとあらゆる経験を経てきたファウスト博士が、ついにたどりついた究極の感動、最も「美しい時」がこれでは、いささか期待はずれというか、平凡すぎるんじゃないか、「もう少し何とかしてくれよ」という思いすらしたのですが、その後、何度かこの部分を読み直し、あれこれ考えてみると、なるほどと思わないこともなくはないというふうに変わっていききました。

おそらくここにはゲーテが生きた時代のドイツやヨーロッパの社会や政治の状況が関わっているのだと思いますが、この部分のキーワードは、いろいろな危険や問題をかかえながらも「自由な土地に自由な民とともに立ちたい」というところにあるのだらうと思います。逆に言うと、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが生きた18世紀末から19世紀前半の時代、すなわちフランス革命を経た後も、いまだなお封建的な旧体制と近代的な市民社会が綱引きを演じつつある時代、とりわけドイツでは人々の自由がまだ十分に認められていない状況の中で、「自由な土地で自由な民が共に生きる」という理念をゲーテは美しい理想として掲げたのではないかと思うのです。

さて、なぜこんなことを長々と語ったかというと、ゲーテの言う「美しい時」と、今日最初に取り上げたイエスの語る「満ちていく時」にはお互いに通底するものがあるように思うからです。

イエスの時代

イエスは「時は満ちつつある」と語り、またそれを「神の国が近づいた」と言い換えています。「時が満ちる時」、それは「神の国が実現する時」です。ゲーテ風に言えば、「とどまれ、おまえは実に美しい」と言いたくなるような「時」、そして「瞬間」と言えるでしょう。

問題はそのような「美しい時の実態」、「神の国」とは何かということです。理想の国、最高の世界、このうねなくすばらしい・喜ばしい・望ましい状態……。神の国をそういうものと仮定するなら、皆さんは具体的にどういうことを想像するでしょうか。私たちにとって、いちばん望ましいもの、望ましいこととは何か。

たぶんドラえもんに登場するのび太なら、たちどころに10や20の具体的なおねだりを並べ立てて、ドラえもんを困らせるといったところでしょう。ある意味で、ファウストもメフィストフェレスというドラえもんのおかげで、さまざまな経験を積み重ねたあげくに、先ほどの結論に至ったのですが、さて現代ののび太ならばファウスト以上にあれこれと欲求を満たしたあとでなければ、ファウスト的な結論に達することはできないのかもしれませんが。あるいは全然達することなく終わるかもしれません。

それはともかくとして、私はイエス・キリストが「神の国」と言った時、そこにはゲーテが語ったような「自由な土地で自由な民が共に生きる」という理想が込められていたように思うのです。「神の国」というとどうしても「国家」とか「国土」のような領域や制度をイメージしがちですが、そうではなくて、これはある種の「関係」を言い表す言葉です。それはつまり「神と人間の関係」であり、また「神のもとにある人間たちの関係」のことです。イエス風に言えば、「誰もが神を愛し、神に愛され、さらにまたそれゆえにこそ互いに隣人を愛する関係」のことです。それが「神の国」であり、裏返すならば、そうした関係に生きることその

ものが「神の国」の実現であると言えるでしょう。

イエスの生きた時代は、ゲエの時代以上に、人間の自由、人間の尊厳、人間の命というものが軽んじられていた時代でした。「自由な土地で自由な民が共に生きる」ということは夢のまた夢と言ってもいい時代でした。ある意味で、イエス自身、そういうことを語ったために、最後に十字架で処刑されたと言ってもいいくらいなのです。

神の国は今ここにある

イエスも、そしておそらくゲエも、決して「美しい時」を見せつけられていたのであり、「美しい時代」に生きざるをえなかったのです。イエスはそうした現実の中で「神の国」が来ると宣言し、ゲエもそうした時代の中で「とどめておきたくなる美しい時」について書いたのです。

今学期の『チャペル・アワー案内』の「統一テーマ解説」は私が担当しましたが、そこから読ませてもらいます。

「福音書冒頭、イエスは『神の国』の到来を告げます。『神の国』とは死後の世界や天の彼方にある異界ではなく、私たちが生きているこの世界のただ中で起こる新しい現実のことです。その新しい現実を引き起こす原動力こそ神の愛・恵み・憐れみにほかなりません。こうした神の働きに応えて、私たちもまた新たな生き方へ踏み出そうとイエスは呼びかけます。それが『悔い改めて福音を信じなさい』という勧めです。『悔い改め』は懺悔とか反省というよりも『生き方を変える／方向転換する』という意味であり、『福音』は『神の国が近づいた』ことを指しています。神の愛・恵み・憐れみを信じ、これに応える生き方とは具体的には『隣人愛』を指していると言えるでしょう。イエスは最も大切ないましめは『神を愛すること』と『隣人を愛すること』である（マルコによる福音書12章28—34節）と説いていますが、それは福音書冒頭の宣言とも響き合う大切なメッセージなのです」。

私たちの生きている現実の中にある「美しい時」を数えあげたらきりがありません。イエスの時代やゲエの時代よりは少しはましになっているのでしょうか。しかし、世界を見ればシリアではつい先日も化学兵器で死に追いやられる子どもやおとなや老人がおり、紛争、難民、貧困などといったいどれほどの人々が厳しい状況の中に置かれているのか想像もつきません。私たちの国の中でも、子どものいじめや虐待から、政治、経済といった大きな枠組みにおける混乱や問題など、連日、「美しい時」が目白押しに並んでいます。

しかしよく見るならば、そうした現実の所々に「神の国」が垣間見えることがあります。たとえ小さなものであれ、かすかなものであれ、「神を愛すること」「隣人を愛すること」「共に生きること」、そのような「美しい時」「美しい経験」を一つひとつ見つけ出すこと、拾い集めること、誰かに伝えていくことは大切なことだと思うのです。

イエスは「神の国はいつ来るのか」と尋ねた人々に向かってこう答えたといひます。

「神の国は、見える形では来ない。（中略）実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」（ルカによる福音書17章20—21節）。

隣人愛の中に、私たちが共に作り上げる自由な関係の中に、そしてそうした日々の生活の中に、神の国が現れるということではないでしょうか。

神の国というのはそういう意味において、決して遠くにあるものでもなければ、神秘的なものでも、空想的なものでもありません。神の国とは、私たちが何を信じ、私たちがどのように生きるかということと結びついた出来事です。

神への愛、隣人への愛というかたちでイエスは神の国における生き方のモデルを示し、またメッセージを発信しました。そのモデルとメッセージをどのように聞くか、どのように応えるかということが、聖書を手にする私たちに問われているのだということを、心に留めたいと思います。

2018年4月11日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録